



ワルプルギスの夜

Walpurgis Nacht

# Walpurgisnacht

階段を降りるなり、そゝは一転して薄暗く、葦品の匂いが鼻をついた。

寂れた市立病院の地下、薄緑色に塗られた廊下は下地のコンクリートがひび割れ、所々に地肌  
が顔をのぞかせている。一応清掃はされているものか、埃っぽさはないが、浮いた塗料が粉にな  
ってそゝかゝゝに拡散していた。

しんと静まりかえる細長い部屋に、革靴の音はよく響く。いつもならそんなことは気にも止め  
ないのに、今は乾いた残響が青年の心を酷く苛んでいる。胸の内を掻き乱し、掻き雀り、抉り取  
るような感覚。あるいは端的に絶望と呼んでも良い。一つ歩を進めるごとに、彼我の距離はわず  
かに縮まる。すぐ背後に押し迫る絶望をなすがままに、彼は最奥にある扉を目指して歩み続けた

簡素で、鍍の浮いた、鉄の扉。ドアノブを回し、そっと押し開く。

蠟燭の火が、扉に煽られてゆるりと揺れた。

六畳子そゝの薄暗い部屋に、男が三人、医師と、警察と、そして恐らく病院の警備員であろ  
う壯年を順繰りに見やり、青年は部屋の中央に鎮座する小さな寢台に向けて足を伸ばした。

地金剥き出しの寢台に、由し訳程度の白いシーツがかけられている。何の飾り気もない無機質  
なオブジェの上には、何かを覆い隠すようにさらにもう一枚のシーツがかぶせられていた。

その純白のペールを、そっとはぎ取る。

まるで、泣いているようだ、と青年は思った。

シーツの下から現れた、少女の顔、つい昨日まで、自分の隣で笑っていた。今日の朝  
には、お揃いの服を着て、一緒に海の見える公園を歩くはずだった。

白い装束に身を匂お彼女の頬を、そっと撫でる。絹のようななめらかな肌は、冷たくなった今  
でもやわらかな弾力で青年の指を押し戻した。そのまま、首元に指を滑らせる。そして、なだら  
かな皮膚にわずかな窪みを感じ取り、青年は唇を強くかみしめた。

左右一対の、楕円形のあざ。

どれほど、苦しかっただろう。書く変色したその痕をなぞりながら、彼は思わず叫び出しそ  
うになった。ぐっと飲み込んだ嗚咽と呪詛に、握りしめた両手が震える。

一点を見ていたはずの視界が、ぐらりと揺れた。遅れて大きな音と右手の痛みが走り、彼は初  
めて自分の行動を知る。やや憚った様子で近づいてきた警備員を制し、今し方寢台に叩き付けた  
右手をそっと少女の胸に下ろした。

その手に返る鼓動は、ない。

何度確かめても同じことは、青年にも理解できていた。だが、例え理解を出来たとしても、そ  
の理解を受け入れるには、事実はあまりに重すぎる。

少女は、死んだ。

人気の無い公園で、無残に殺された。

警察の男がゆっくりと近づき、青年の肩に手をやった。医師は少し乱れたシーツをそっと少女  
の亡骸にかけ直し、軽く黙祷する。青年は警察の男に促されるまま寢台から下がると、警備員の  
開けた扉から一緒に廊下へと退出した。

事件性があるため、このまま司法解剖に回されるのだと、警察から説明を受ける。死んでから  
も陵辱されるんですね、と青年が言うと、警察の男は苦い顔をした。もう何十回と無く恨み言を  
聞いてきたよ、と、ため息混じりに言うと、男は青年の肩を軽くたたいてそのまま廊下の向こう  
へと歩いて行く。

一人取り残された青年は、扉の向こう側をもう一度見やった。純白に包まれた少女、彼女の体  
温も、声も、永遠に失われ、もう二度と戻ってこない。そしてこのまま、彼女の肉体も失われて  
しまうのだろう。わずかな記憶と記録を残して、彼女は『いなくなってしまう』。

いやだ。

そんなのは、いやだ。

ただの思い出に成り下がるなんて、そんな現実を受け入れることなど出来ない。受け入れない  
。ただ一方的に思い出だけなんて、そんなのは自慰行為に等しい。まだ話したいことはあった  
。まだ一緒にしたいことはあった。そしてそれらはこれからも増えていくはずだった。増え続け  
るだけのはずだった。

途絶えることなど、無かったはずなのに。

青年は、その場で膝をついた。閉じられゆく扉が、世界の終わりに見える。この扉さえつなぎ  
止めれば、少女はいなくならないかも知れない。そんな馬鹿げた思考すら頭をよぎる。

だが、今の青年にとって、それは馬鹿げたものであると同時に、何よりも甘く魅力的な希望で

もあって、扉を開めさせなければ、彼女は消えない。きっといつか、開け放たれた扉からいつもの笑顔がひよっこり顔を出ずに違いない。

そうだ。

そうに、違いない。

青年の顔に、わずかに、わずかに色が混じる。絶望に沈んだ里の中に、狂気という里が混じる。そのわずかな明度の差が、彼を意識の虚へと、境界線を越えた先へと、深く飲み込んだ。

それは、真。

生と死の狭間で運命を嗤う、魔女達の饗宴。

「あなたの願い、叶えてあげよっか？」

一切合切を台無しにする、一夜限りの狂い詩。

## ワルプルギスの夜

目覚めると、青年は自分の部屋にいた。

いや、正確には恐らく自分の部屋であろうという確信を得るまでに数度あたりを見渡した。机の上にある写直立てを見て、ようやくここが白室であると結論づける。

霧のかかったような思考の瞳を振り払うように頭を横に振り、青年は今に至る経緯を思い出そうと天井を仰ぎ見た。何の変哲もない白い壁に、ぼんやりとした記憶が思い描かれる。

空然の訃報。変わり果てた少女。閉じゆく扉。そして、吉。

吉？ そうだ。確かにあのとき、吉を聴いた。まるでその場にそぐわない。それなのに何故か心地よい響きを伴った。吉。その声に導かれるまま、自分はゆっくりと立ち上がり、錆の浮いた鉄扉に手をかけて、それから？

しばらく記憶の海を彷徨い、それが徒勞であることを青年は思い知った。そもそも、どうやって帰り着いたのかも記憶にないのだ。もしかしたら、空然の出来事に張り詰めた気を失って、誰かに連れ帰られたのかも知れない。だが、それにしても状況が奇妙だ。なぜなら彼が今思考を巡らしているのは、椅子の上だからだ。ベッドの上ならまだしも、椅子に座らされて寝かされるなど普通ではない。

天井から、机に視線を移す。ここが自分の部屋だと確信せしめた写直立てには、青年と、そして傍らにたたずむ少女の姿が写った写直が飾られていた。手を伸ばし、そっと写直立てを手に取る。二人が出会った記念日に撮られた、一年目の記録。ほんの最近の事だと思っていたが、気付いたらそれからさらに一年が過ぎ去っていた。

ピンクのワンピースに身を匂み、やわらかな笑顔をとたえる少女。記憶の中にある透き通る声で、今にも語りかけてきそうな、そんな表情をしている。思わず写直の中の彼女に笑いかけようになり、青年は苦い顔をした。彼女の喪失を既に受け入れつつある自分を、唾棄したくなる。そうじゃない。諦めたくない。諦めたくないからこそ、自分は契約を、

.....契約、って、なんだ？

「やっと思い出してくれたね」

「!?」

突如耳元に聞こえた声に、青年は思わず椅子から転げ落ちそうになった。何とか持ち直し、声のした方向を振り向く。だが、そこには誰もいない。幻聴だろうか？ そう思ったのと同時、彼の顔を何者かが掴んで引き寄せた。

その目線の先、青年はあり得ないものを見て思わず気を失いそうになる。

女の顔があった。いや、よく見れば童女と言っても良いほど幼い顔立ちをしている。勿論、彼女が何故、どうやって、どのような理由でそこにいるのか知る由もない。だが、それら全ての疑問すらどうでも良いことになってしまうほどの問題がある。

彼女が、全く逆さまを向いていると言うこと。

天井に重力が移ってしまったのだろうか？ 確かに彼女の足は『天井を踏みしめている』。だが、自分は今も床に足をつけている。単純なパラドックス。だが目の前の彼女は、そんなものは何でも無いかのように振る舞う。

混乱する青年を見て、まるで悪戯を牽しお様に笑う女。彼の顔から手を離すと、ぽんと天井を蹴って本来の重力の方向に戻った。しかし、笑顔のまま振り向く女の足は、床には接していない。

「気付いてくれるの。ずっと待ってたのに。退屈で寝ちゃってた」

欠伸のまねごとをする女を前に、青年は何とか混乱を収めようとしていた。物理法則を無視して漂う女は、どうやら幽霊の類いではないらしい。今でも頼に残る温かな彼女の手の感触が、それを否定している。さりとて人間でもあり得ないことは明確で、いくら考えたところで結論は出そうにない。

ならば、と青年は思いきって根本的な質問を切り出した。

「お前は、誰だ」

瞬間、女はきょとんとした顔をしたが、ややあってキャハハと甲高い声で笑い出した。

「え〜？ ホントに覚えてないんだ〜。ガッカリだな〜」

台詞とは裏腹に全く落胆の色を見せない女に、青年は苛立ちを覚え始めた。超常的なとアスを除いてしまえば、女はただの迷惑な闖入者に過ぎない。途方も無い喪失感に打ちのめされた彼の心に、それ以上彼女に関心を割く余裕は無かった。

しかし、

「せっかく愛しのあの子を生き返らせてあげようと思ったのに」

その全ての意識を、彼女はたった一言であっさり奪い取った。

「今、なんて言った」

「あなたの一番して欲しいこと」

詰め寄る青年に意味深げな笑みを浮かべると、女はひらりと再び天井に足をつけた。そのまま行き止まりまで歩くと、見せつけるように壁に沿って歩き出す。だが今の青年にとって、彼女の存在の特殊性など大した意義は無い。

椅子から立ち上がり、青年は壁に足をつけてこちらを見上げる女の前に立った。女はそこにしゃがみ込んで両手でほおづえをつくと、小首をかしげて青年の瞳をのぞき込む。

赤く透き通る瞳が、青年をとらえた。その刹那、まるでストロボスコープのごとく強烈な光の明滅とともに、様々な光景が脳裏に映し出される。

少女の亡骸。

安置された白い部屋。

閉じゆく鉄扉。

伸ばした右手。

そして、現れた赤い女。

全ての映像が青年の中で弾け飛び、彼は全てを思い出した。あの扉さえつなぎ止めれば、そう心の底から願った瞬間、自分の周囲が凍り付いたように動きを止め、目の前にこの女が現れたのだ。

○

真っ赤なパーティードレスのような衣装に身を包み、深紅に燃える髪をなびかせた女は、童女のような顔立ちにまるでそぐわない妖艶な眼差しで青年を見、ルージュののったやわらかな唇で

言葉を紡いだ。

「あなたの願い、叶えてあげよっか？」

「……え？」

空然目の前に現れた女の言葉に呆気にとられる青年を尻目に、女は開かれたままの鉄扉をすり抜けて余屋の寢台に向かう。慌てて追いかけた青年は、扉の向アウの光景を見て絶句した。

少女の亡骸が、宙を浮いている。だらりと力の抜けた四時が垂れ下がり、肩まで伸びる両麻色の髪が無風のはずの空間で揺れた。その隣には、少女の後頭部に手を当て同じように浮遊する女。

「アの子、生き返らせたいんでしょ？」

啞然とする青年に事も無げに言い放ち、女は少女の亡骸から手を離れた。思わず駆け寄り伸ばした手の元に、まるで羽のごとく軽い亡骸が収まる。横抱きに抱えた青年はそのままゆっくり彼女を地面に下ろした。

「お前、一体……誰だ？」

引きつる声で問う青年に、女は何故か嬉しそうな顔で答える。

「私はねー、あなたたちの言葉で言うなら『魔女』ってことになるかな？」

「魔女……？」

「そ、魔女、あなたの強い欲望に惹かれて、アっちにやって来ちゃったの！」

そう言って、女は衣装をひらりと翻して、青年が抱える少女を指さす。彼は女の指先をたどるように少女の亡骸に視線を落とした。

そこに、奇妙な印があるアとに気付く。

少女の左胸、ちょうど心臓の高さにある位置に、赤い六芒星が浮かびトがっていた。鮮血のように鮮明な赤の印は、薄暗い室内でぼんやりと輝いている。青年はそれに手を伸ばしたが、手のひらに返ってきた冷気に思わず手を引っ込めた。

「あれは、なんだ？」

浮かぶ女を仰ぎ見ると、彼女はクスクスと笑いながら答える。

「それは、契約書よ！」

「契約……書？」

「そ、あなたの『願い』を叶えるための！」

思わぬ答えに、青年は言葉を詰まらせた。流れがあまりにも荒唐無稽に過ぎる。止まったままの周回時間、空加現れ、浮遊する女、そして、魔女の契約。いずれも現実にはあり得ない。たちの悪い冗談か、或いは悪い夢でも見ているのだろうか。

青年の内に一瞬の躊躇が生まれ、程なくして願望が勝った。それが例え夢で会ったとしても、失うものは何も無い。そして仮に現実であったとして、少女が生き返るのであれば彼にとっていかなる代償を払う価値がある。

「……契約の内容は？」

青年が問うと、女は笑顔のまま、しかしやや袖妙な口調で語り出した。

「私があなたの願い事を一つ叶えてあげる代わりに、あなたは私の願い事を一つ叶える。どんな願いでも叶えてあげられるけど、それがどんな願いだとしても、私の願いを必ず一つ叶えること。例えどんなに釣り合わない願いだとしても、ね！」

最後の一言に妖艶な笑みを垂せ、女は浮かんだまま青年に顔を近づけた。ぞくりと背中に寒いものが走るのを感じながら、青年はなるべく平穏を保った表情で女に相対した。

アンフェアな契約であるアとは、目に見えている。少女を生き返らせる代わりに、自分の死を命じられる可能性すらある。死なないまでも、彼女と一緒にこれまでと同じ生活を続けることは困難になるかもしれない。

青年の手が、わずかに震えた。彼が本当に望むのは、何事も無く少女と歩んでいける人生だ。彼女が死ぬアと無く、彼が欠けるアとも無く、ともに想いを全うできる人生。

しかし、その願いは『一つ』。彼の願いと、そして少女の願い、一つで初めて一つとなる。

実際、女はそれを是としなかった。少女の意思がない以上、その願いは青年一人の意思で実現できるものではないし、何より『何事も無い』ことを女は許さない。それは女の願いの幅を狭める条件だ。

だから、選択肢は、一つしか無い。

「……彼女を、生き返らせてくれ！」

平穏に振る舞ったつもりでも、声が震える。女はそれを見て取ってまたもクスクスと笑うと、

左手を少女の胸の六芒星にあてがった。そして青年の右手を取ると、強がる彼の手を彼女の左手の上に垂せる。先ほど感じた冷気は無く、まるで脈打つような感覚と柔らかな暖かさが彼の手を包み込む。

鼓動。

アアに感じるのは、確かに少女の鼓動だ。

青年の頬を、思わず涙がアぼれ落ちる。だが、その鼓動はとても弱々しく、今にも止まりそうなほど不安定だ。女の方を見ると、彼女は唇に指を当てて囁くように言った。

「純粋な『魔法』だけで動かすのは、これが精一杯。完全に生き返らせるには、『触媒』が必要よ！

「魔法　　触媒　　？」

およそ現象とはかけ離れた言葉の流れを、青年はオウム返しのように呟く。その間も、彼の手に返ってくる熱は弱く、拍動も感じられなくなっていく。

「そう、触媒。この子の心臓を、ずっと動かしておくための、わ！

だから、まだこれは仮契約。そう言って、女は青年の目をまっすぐ見据えた。青年の奥深く、まるで彼の内面を直接のぞき込むような視線から、目をそらすことが出来ない。

恐らくそれは、彼の最も深い場所、魂とでも言うべきものに刻まれる <sup>契約</sup> <sub>キャンディド</sub>

「私の名前を呼べば、契約は成立よ。さあ、呼んで。私の名前は、『輝ける赤き純情』」

彼女の言葉に、言葉の波動に、揺さぶられた魂が、うねる。彼女の名前を呼ぶだけで、愛しい少女が蘇る。甘羊で、歓喜に満ちた契約。それと引き替えに支払うべき代償が、目の前の報酬の前に霞んでいく。

そうだ、彼女さえ蘇れば。

彼女さえ、蘇れば。

キャンディド

「……『輝ける赤き純情』」

呟いた瞬間、青年の目の前を赤い闇が覆った。視覚が赤以外の色を認識できなくなり、聴覚も、嗅覚も、味覚も、触覚も、さらには自分と周囲の境界すらも曖昧になっていく。

己の願いを頼りにようやく自我を保つ青年の前に、より深い赤の六芒星が現れた。それが加速度的に回転し、やがて弾け飛ぶ。そして、その中から溶け出すように現れた深紅の魔女は、青年の右頬に手を当てると、左頬にそっと口づけた。溶けそうなやわらかさを感じたのもつかの間、青年の意識は赤に溶け込んで霧散する。その様を、深紅の魔女は、笑いながら見送った。

○

「　　夢、じゃ無かったのか」

「もちろん。」

壁に座り込む女を見下ろしながら、青年は苦い顔で呟いた。夢では無いと言うことは、少女を生き返らせる事が出来ると同時、自分自身の身柄が、既に魔女の手に預けられてしまっていると言うアを意味する。

得がたい報酬に盲目となった自分に懊悩する青年を見ながら、魔女は手を伸ばして彼の鼻に指を押しつけた。

「何悩んでるの？　今更契約の破棄なんて認めないからね」

「　　そんなつもりじゃない」

彼女の手を振り払い、青年は恹然と答える。彼女はクスクス笑うと、卑の子は強がるのよわーなどと言いながら壁から離れ、青年の前に立った。地に足をつけると青年より一回り小さい彼女は、やはり彼を見上げながら話し始める。

「さ、それじゃ、早速働いてもらおうかしら。愛しのあの子を生き返らせるために」

契約。

青年の願いを叶える代わりに、魔女の願いを一つ叶える。それが契約の内容だった。例えそれがどれほど釣り合わない対価であったとしても、支払わなければならない代償。その大きさを、青年は最大限に見ていたつもりだった。

「　　何をすれば良い」

しかし、魔女から提示された内容は、彼の想像の枠そのものを、大きく逸脱していた。

「そうね、じゃあ、処女の心臓を持ってきてもらおうかな」

「なに？」

青年は耳を疑った。いや、その声は明朗で、実際には確実に言葉の意味をとらえられていた。だから、願望として耳を疑っていたかった。と言った方が正確かも知れない。

「だ・か・ら、処女の心臓よ、新鮮なのじゃなきゃ駄目よ？」

魔女は先ほどまでと同じ、無邪気なまでの笑顔で繰り返す。彼はじっとりと湧き出てくる汗を感じながらも、微動だにできなかった。唇と手足が、酷く強ばっているのが分かる。まるで全身の血液を抜き取られたかのように、あちこちで鈍いしびれが走った。

とても容易に領ける内容では無い。目の前の魔女は、処女を殺してその心臓を抉り取れと言っているのだ。彼女が魔女であるという事実を、改めて思い知らされた。それはもう、人としての領分を完全に超えている。

拒否権が無いとは、言われなくても理解できた。既に契約を交わした以上、破棄すればそれ以上の凄惨な対価を支払わされることになるのだろう。最早、想像もつかないほどの対価を、

轟々と鳴る耳鳴りを仄して、青年は渴ききった喉を絞るようにうめいた。理を曲げようとした。これが罰か、人外のものと契約した、これが報いか。声にならない声をあげる青年を、魔女は小首を傾げて見ていた。

「そんなに唸るほど大変？ あ、分かった。処女の選別を心配してるの？ 大丈夫よ、私がちゃんと思分けてあげるから」

勝手な想像に回答を出し、得意げに語る魔女を、青年は畏怖を超えてまるで何か質の悪いオブジェでも見るような目で見ている。理解の範疇を超えた存在を、脳が『物質』としか認識できないのかも知れない。

だが、目の前に屹立するオブジェの発する呪いの言葉に、青年は従うしか無い。

彼の頭の中で、覚悟と諦念の歯車が噛み合った。

「分かった」

掠れきった声で、承諾の音を表す。そのままきびすを返すと、青年はベッドの上に投げ出されていたジャケットを拾い上げて身にまとった。魔女の方に目を向けること無く、開け放たれたままの部屋の扉から外へ出る。背後から押し殺したような笑い声がついてくるが、一切耳を貸さないようにつとめた。

外は、既に夜明けの帳が降りていた。契約からどれくらいの時間が過ぎたのかは分からないが、恐らくはそれほど経っていないのだろう。ずっと寝ていた割には空腹感に乏しいことも、それを指示している。

住宅街を抜け、少し広めの公園に出た。そこからしばらく歩くと、街路樹が立ち並ぶ遊歩道に出る。冬寒さを始めた木々の中を歩き、小さな十字路を渡ってさらに先へと進むと、そこに先ほどよりも二回りほど広い公園が姿を現した。

そこは、少女が発見された場所。

卑劣な暴力を受け、挙げ句絞め殺された場所。

検分はもう終わった後なのか、警察やそれに類する人間の姿は無かった。中央に建てられた時計は既に深夜零時を回っており、それ以外の人影もほとんど無い。隅のベンチにはホームレスの布団らしきものが転がっていたが、今は何処かへ行っているようだ。

時計台の前まで歩き、青年は周囲を見渡し、自嘲気味に笑った。目指す場所など無かったはずなのに、まるで何かに吸い寄せられるようにこの場にやってきていた。無意識の行動とは恐ろしいものだ、と彼は心の中で独りごちる。彼をこの場に招いたのは、少女を悼むが故か、それとも

「うーん、瘴気が濃くて良いところねー」

背後で魔女が緊張感のない声を上げる。青年は生ぬるい溜息をつきながら、ジャケットの内側に手をやった。

そこには、家から持ち出したナイフが仕舞われている。以前に海外にいた友人からもらった、やや大振りのサバイバルナイフだ。魔女の要求は処女の心臓であって、処女の命ではない。動物を腑分けするためには、それなりに頑固な刃物が必要。

喉の奥から嫌な味の液体がしみ上げてくるのを、青年はぐっとアラえた。思わず想像してしまった光景を、彼は必死に頭から追いやろうとする。何かを考えればその分だけ、精神を蝕まれるだけだ。魔女のオーダーに応えるためには、自分自身も人外のものにならないといけない。

「やだ、緊張してるの？ 大丈夫だよ、私がついてるんだから」

魔女の声には応えず、青年はじっと前を見据えた。

この公園は、街灯の数が少なく、光のささない死角が多い。少女も街灯の死角になるところで殺されていた。人通りもあまりなく、会社や学校帰りの人間がいなくなると全く無人となる時間

も長い。少女の家はその先にあり、いつもはまだ公園に人がいる時間帯にここを通過して帰宅している。

少女の警戒心が薄すぎた。と言えはそれまでだが、それは決して免罪符を意味しない。少女を殺した犯人を、青年は死ぬまで許すことは無いだろう。

そして、自分も今からそうなる。

「あ、あの子はどうか？ 飢女だし、気も弱そうだよ？」

まるでナンパをけしかけるような口ぶりの魔女を無視し、青年は公園の入り口に現れた人影を見た。小柄で、何処かおどおどした堅い動きの少女だ。高校生くらいだろうか。小洒落た私服と胸は、友達と遊びに行った帰りなのかも知れない。或いは恋人と？ おびえているのは、夜道を一人歩く心細さだけでは無く、遅い帰宅を叱責する両親を思い浮かべてのことなのかも知れない。

考えないように努めていたはずなのに、様々な想像が止めどなく湧き出てくる。大事な人を失った彼には、それを止めることはできなかった。一人の死は、その個人の死という事実にとどまらない。その周囲の人間の心をも、容易に壊す一つの『現象』だ。

近づいてくる。黒髪の子。時計台に寄りかかる青年の方に気付いたが、特に警戒するアとも無くアちら側へ歩いてくる。いつの間にか、魔女は姿を消していた。なにやら呟く声だけはするから、近くに存在はするらしい。

青年はなるべく少女に目を向けないようにしながら、じっと彼女が通り過ぎるのを待った。懐に忍ばせたナイフを握る手が、じっとり汗ばむ。緊張で乾燥した目が、チクチクと痛んだ。自分の鼓動が耳元で聞えるほど、感覚が鋭敏になる。

苦くなる呼吸を悟られないように、胸筋に力を入れた。一歩、二歩、彼女が近づく。ほんのわずかな距離が千里にも錯覚するほど引き延ばされた時間の中で、少女が青年の横を――時計台によって作られた陰の領域へと足を踏み入れた。

その、一瞬。

青年のナイフが、少女の首に深く突き刺さった。踏み込む足音に驚き振り返った表情のまま、少女の口がパクパクと鯉のように開閉する。声帯まで食い込んだ刃は、獲物に声をあげることにすら許さない。

血管を刃で塞がれ、突如行き場を失った血液が傷口から溢れ出した。ズバリ、と言う音を立て、貫かれた少女の喉からも深紅の塊が吐き出される。急激に失われていく血液と酸素供給の途絶は、何が起きたのかも理解させぬまま彼女の脳細胞を死滅に迫りやう。

全身の筋肉が弛緩して地面に叩きつけられそうになる少女を憐れみ、青年は彼女を公園の隅へと運んだ。いつの間にか姿を現していた魔女が、嬉々として横で飛び跳ねる。

「凄いですい！ 一回で仕留めるなんて、まるでプロみたい！」

「……………」

魚のエネルギーによって生み出された興奮と、一度と引き返せぬ過ちを犯した後悔が縋い寄せになって、青年は言葉を失っていた。物陰に少女を運んだ後、血塗れになった自分の右腕をじっと見つめる。まるで、他人の腕のようだった。ナイフを握っていた感触も、少女の首を貫いた瞬間の感触も、何も思い出せない。

汚れていない左手で、右腕を握んで持ち上げる。そっとナイフに右手をかけると、ゆっくりとそれを引き抜いた。情性で流れるだけの血液が、破綻した血管からだらりと流れ落ちる。

そのままナイフを右手にしっかりと握らせると、青年は少女の服を切り裂いた。履になった布地はあっさりと一分され、少女の滑らかな肌が露わになる。控えめな乳房を左手で横へ押しつけると、ナイフの切っ先を彼女の肌にあてがった。

わずかな逡巡の後、刃が少女の皮膚を貫いた。そのまま、楯一文字に滑らせる。限界まで失血したはずの体からわずかに血が流れ、まるで抵抗するように傷口を覆っていくが、すぐに乾いてひび割れていった。忘れていたはずの吐き気がこみ上げて、耐える間もなく空っぽの胃から胃液が吐き出される。

だが、皮膚の下が覗き、筋繊維が断裂し始めた頃から、嘔気は無くなり始めていた。凄惨なはずの行為が、ただの作業に成り下がっていく。皮膚を剥ぎ、筋肉をそぎ落とし、まるで家畜でも解体するかのようには解剖を進める。剥き出しの肋骨が見えた頃には、ナイフの柄で骨を叩き折ることに何の躊躇も無かった。折れた骨を引き剥がし、邪悪な肺を切り裂いて小さく縮める。

目当てのものは、白い瞳に包まれて体の中心部に納められていた。中身に傷をつけないように丁寧に瞳を剥ぎ、接続する血管を切り落とす。零れ出る血もそのままに、その下に隠された赤い臓器をゆっくりと両手に取った。

最早脈打つことの無い、心臓。

ほんの300g程度の、生命の動力源。

「よくできました！ これなら良い触媒になるわよー」

そう言って魔女が青年の手から心臓を拾い上げようとしたが、青年はその手を払いのけた。意外そうな顔をした魔女の方を見ること無く、血にまみれることも厭わずそれを胸に抱く。失われていた感情が、ようやく息を吹き返し、荒波となって青年の心を揺らした。

慟哭 と 嗚咽。

止めどなく流れる涙が、血に塗れた青年の顔を洗い流していく。

愛しい少女を生き返らせるため、幸せな時間を取り戻すため、大義名分と言うにはほど遠い利己的な欲望。そのために、それだけのために、青年は別の少女を殺した。無残に、無慈悲に、その心臓を抉り取った。

殺人者を憎悪しながら、それ以下の存在に身を随とす事の滑稽さ。最良、魔女の誘惑では済まされない。自ら堕ちたのだ。己の浅薄な契約を顧みず、その責を無関係の少女に押しつけたのだ。

それで少女が蘇ったとして、彼女がそのことを知ったとしたら。

何のことは無い。

次に少女を殺すのは、自分だ。

「ふ　　ふふ　　」

取り戻したのは、笑い声だけだった。弛緩しきった、だらしない笑い声。だが、今となっては吉なんて必要なかった。青年は、目的を果たした。その心臓を魔女に手渡せば、少女は生き返る。その裏で、今奪われた少女のために、誰かが絶望に空き落とされる。その誰かは、彼と同じように魔女と契約するかも知れない。或いは、愛しい少女ですら、魔女と契約した誰かに殺されたのかも知れない。

だとしたら、これはただの通過点に過ぎないのだろう。延々と続く人殺しのバトン、次の走者に渡すだけの。

青年は顔を上げ、目の前の魔女を見た。再び笑顔をとたえる魔女に向けて、乾ききった笑顔をくれてやる。

そして、両手に抱えた心臓を魔女の目の前で握りつぶそうとして、

彼の意識は、闇に閉ざされた。

○

そこには、何も無かった。

何も無い、と言う表現が正しいかどうかは分からない。ただ、どこまでも広がる空間があって、彼はその空間の一部でしか無かった。手を伸ばそうと思っても手はないし、しかし空間のどの一部分でも認識することができた。

散り散りになりそうな意識をまとめ上げようとしても、広大な空間にそれらをとどめておく術がない。形という概念が存在しないそこでは、自分というものすら曖昧になっていく。

ふと気付くと、空間の中に一占だけ、ほんの一占だけ他とは違う場所があった。この空間には色という概念すら無かったが、その一占だけは、『赤』という概念が存在した。

彼は空間に希釈された自分を、何とかその一点に注ぎ込もうとした。一つとっかかりを見つければ、後はそこへと至る流れを作り出せば良い。彼はその点に向けて、ゆっくりと、ゆっくりと『自分』を注ぎ込んだ。

ゆっくりと、ゆっくりと。

まずは、白が目についた。

そこはやはり広大な空間のようだったが、取りあえず白という色は認識できた。徐々に視界が開けてくると、それ以外にもたくさんの色が目の前で踊っていることに気付き始める。そして、視界というものを認識できることに、青年は軽い驚きを感じた。空間という概念ではなく、自分という個が、そこでは存在できる。

あたりに目をやると、不思議な液体の入った瓶や注射器、あちこちに伸びるコードのようなものが散乱していた。戻ってきた聴覚に規則正しい電子音が聞えてくる。どうやら、病室のベッドにいるらしいことは、想像がついた。ただ、どういう経緯で自分がここにいるのか、霧がかかったように不明瞭になっている。

何となく気配を感じて、青年はゆっくりと視線をそちらにやった。少し向こうに、人影が見

える。何処かで見たような角のある帽子は、恐らくナースキャップだろう。呼ぼうとしたが、声が出ない。まだ戻ってきてはいないようだ。

だが、その努力に気付いたものか、看護婦と思われる人影がこちらを振り返った。ピンク色のナース服を着た看護婦は、青年の顔を確認すると、にっこりと笑ってこちらにやってくる。近くに来ると、青年を挿んで向こう側にある機械に手を伸ばした。

看護婦が身をかがめる。胸の谷間がくっきりと見えた。香水のいい匂いもした。ようやく戻ってきた嗅覚に感動すら嘗えたが、まだ手足の感覚だけは戻ってこない。しばらく機械をいじっていた看護婦が、ようやくその手を止めた。「もう大丈夫？」と言う声に応えようとして、声が戻っていないことを思い出す。だが、そんな青年の様子を見て彼女はクスッと笑うと、彼女の右手の人差し指を青年の唇に押しつけた。

「ごめんね。声を戻すのを忘れてた」

その言葉を聞いた瞬間、青年の全身に衝撃が走った。まだ雷がかっていた意識が急激に晴れ、これまでの全てのことを思い出す。そして反射的に彼女から距離を取ろうとして、自分の四肢がぱくりとも動かないことに愕然とした。よくよく見ると、彼の手足にはまるでぬいぐるみの縫い目のような模様が施されている。

「一体俺に何をした、『輝ける赤き純情』！」

何とか動く首を巡らせ、青年はナース服姿の魔女に叫んだ。魔女は悪びれた様子もなくコロコロと笑うと、青年のトに淫かんで告げた。

「何って、契約だもん。あなたのお願いを聞いて、愛しのあの子は生き返らせてあげたのよ？ だから、今度はあなたが私のお願いを叶える番」

青年の頭が混乱する。契約は、互いの願いを一つずつ叶える約束だったはずだ。だが、青年は既に魔女の願いに応じて処女の心臓をえぐり出した。その後確かに握りつぶそうとしたが、その直前に意識を失っているし、恐らく心臓は彼女の手に入ったのだろう。ならば、それで契約は完了では無いのか？

だが、それを否定するように、魔女は青年に言った。

「あ、もしかして処女の心臓が私のお願いだと思った？ 残念でしたー。アレはあの子を生き返らせるための触媒に必要だったから、白給してもらっただけ」

「そんな　　！　　だけどあのと『働いてもらう』と　　」

「そうよ？　彼女を生き返らせるために働いてもらうって言ったわ。私のために、とは言っていないはずよ？」

「ば　　」

馬鹿な、と言いたかったが、確かにそう言っていた。魔女は自分のためのお願いだと一言も言っていない。愛しのあの子のために働け、と言った。

「だから、ここからが私のお願い。あなたには私のお人形さんになってもらって、ずっとここぞ私とおままごとをするの。もう百年以上ずっと同じお人形使ってたから、飽きちゃったんだ。ね、良いでしょ？」

「　　！？」

目の前が、闇に閉ざされたような気がした。手足の模様は、その見た目通りのぬいぐるみの縫製を表していたのだ。魔女というのがどれほどの長きにわたり生き続けるものかは知らないが、さっきの言葉からは少なくとも百年以上彼女のおもちゃとして生きていかねばならないことになる。

手足の自由もきかず、ただ彼女にもてあそばれ続けるだけの百年。

それは、死よりも辛い苦悶の牢獄。

「や、やめろ　　やめてくれ、頼む　　！！」

「うーん、でも、契約だから、仕方ないよね。それに、お人形さんは勝手な台詞しゃべっちゃ駄目なんだよ？　これから気をつけてね」

「　　！！　　！！」

再び魔女の人差し指が、青年から言葉を奪い取った。それだけでは無く、取り戻した視覚も、聴覚も、嗅覚すらも奪われ、彼は魔女の手のひらサイズまで締められる。細部まで観察した魔女は、たくさんのお人形が並ぶ陳列棚にそっと青年のお人形を飾った。

「うん、！　　やっぱり新しいお人形さんがいると嬉しくなるわね！　　ふふ」

嬉しそうにくるりと回転すると、魔女はそのまま部屋を後にした。部屋に、無限の静寂が訪れる。何も動かない空間で、飾られた青年お人形のガラスの目から、ひとしずくの涙がこぼれた。

「あ、そうだ！ 一人で寂しくないように、女の子のお人形も入れておいてあげよっと！」

(了)